

# 在原滋春

——伊勢物語形成との関係について——

福井貞助

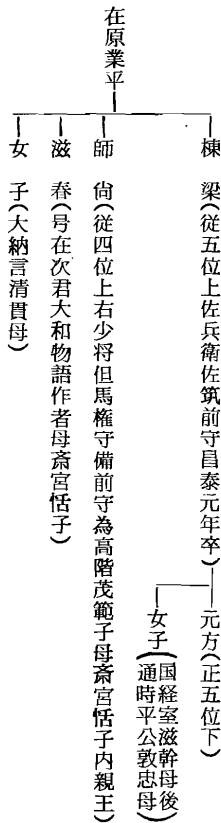
## 序

在原滋春という人は業平の二男であり、古今集に六首の歌をのこし、古今六帖、新勅撰等撰集にもその名と作品をとどめ、大和物語に歌と共に語られている人である。伝記については、古今和歌集目錄に「藏人頭右近中将業平之二男字在次君是也」とあり、作者部類に「六位内舍人中将在原業平男」などとあるのみで詳かではない。現今見るところ、歌人としても格別に重い位置を占めず、官人としてもさしたる存在ではない様で、特にとりたてゝ研究もされていない。ところが所伝を探るとこの人物は、伊勢物語を書き継いだ人物である業平自筆伊勢物語相伝の人である（愚見抄等中世伊勢物語諸註所説）とか、大和物語の作者である（虚静抄或説等）とか、又伊勢物語の鎌倉時代の註釈研究書である伊勢物語髓脳には右近中将在原朝臣滋春謹序として「今在原滋春昔の事をおもひみづから心をめぐらしてたらちおのしるしのこせるふしをとぶらひをけることばをうけてわづかに七ヶ条の髓脳をえらぶところ也」<sup>(1)</sup>とある如く、この書の著者におさまっている。今日これらは皆否定されている。滋春が伊勢物語を書き継いだり相伝したりし

た事は他に明証ある訳ではなく、大和物語作者というのも根拠として確としたものもない。髓脳に至っては明らかに仮託の書である。しかし乍ら王朝古典の作者や伝来についての所伝というものは十分批判すべきではあるが、頭から否定する事を慎むのは国文学研究の常道である。源氏物語の作者に紫式部の子大式三位賢子や父為時の名まで伝わるというのも、当代における文芸作品の伝流伝播の実態を考え合わせる必要がある。伊勢物語の主人公に擬せられた名歌人在原業平の子の古今歌人滋春が全く歌物語に無縁であろうか、本稿では滋春に焦点をしぼって歌物語形成の側面を探究したいと思う。

一

本朝皇胤紹運録によれば業平の子孫は左の如くである。



業平の長子棟梁は寛平御時后宮歌合にその名見え、古今集には四首の歌をのこしている人で昌泰元年に歿しているが、その子元方は古今巻頭歌をはじめ多くの歌をもつて名高く、女滋幹母も高名である。業平の女は本朝皇胤紹運録には大納言清貫母としてあるが、この清貫とは有名な阿倍清行でも、三善清行でもありえないだろう。何となれば前者は

大納言安仁男であるが業平と同年だし、後者文章博士清行は業平より二十才若年にすぎない。勢語古注に七本差別説があり、安倍師安本をたてる。師安とは誰か疑問視される人名だが、一注本に安倍清行の名をもつてするものがあり、大納言清貫母の記載と何らかの關係があるうか。次に師尚について見るに、紹運録の注記は江次第にもあるが、古事談に「高家者、業平之末葉也。業平朝臣為勅使参向伊勢之時、密通於斎宮云々、懷妊生男子、依有露顯之怖、令撰津守高階茂範為子、師尚是也」と見えるもので、高階家系図に「茂範—師尚—良臣—成忠—高内侍」とある。高内侍とは関白道隆の室、父成忠は高二位といわれる人で、七本差別説に高二位尼本の名称が見えるが、塗籠本奥書に「此本者高二位本朱雀院のぬりごめにをさまれりとぞ」とあり、高二位本が王朝末勢語主要伝本の一である事は周知の如くである。師尚にまつわる伝え、すゝんでは業平と斎宮との秘事など疑わしく、これらを断ずる資料とてないのである。次に滋春にうつて、滋春の母についても斎宮恬子とする注記はどうであろうか。毘沙門堂古今集注によれば、藤原良相の女染殿内侍を以て「在原滋春が母也」とし、又大和物語虚静抄によつてもこの説ある事が知られる。このように斎宮恬子あるいは染殿内侍などを母とするという伝えはその背後に業平と交渉があつた女性の推定あるいは附会という事実を考慮する事が必要であらう。<sup>(2)</sup> どうでもよいような事であるが、実はこの母なる人の事が古今集に見えているので一考する。卷十六に、

甲斐のくににあひしりて侍りける人とぶらはんとてまかりけるを、みちのなかにてにはかにやまひをして、いまいまとなりければ、よみて京にもてまかりて、はゝにみせよといひて人につけて侍りけるうた、在原しげはるかりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

(引用は貞応本による諸本大差なし。  
以下引用の古今集も貞応本による。)

と見えている。これによれば、滋春は母に先立つてなくなつたという事がいえる。滋春の生歿年は全く未詳であるが、古今集に右の歌がのせられているところを見ると、古今集撰集以前になくなつてゐる事となる。ただ先学の指摘

される諸記古注に見える古歌合に滋春家歌合がある。山岸徳平博士は古今集古注等を檢して古今以前の歌合として、古今卷十三歌紀友則歌についての注記によつて延喜三年在原滋春家歌合をあげられた。(歌合の起源及び古今以前の歌合國語劇刊号)たゞし久曾神昇氏も歌合年表にこれを掲げられたが、実否疑はしいとのべて居られる。(伝宗尊親王筆合、舊歌合卷研究)もしこの歌合が事実とすれば滋春の歿年は九〇三年からまもないということにならう。良相女については何もわからないが、斎宮恬子は延喜十三年六月八日に薨じているから、仮に母とすれば年紀は一応あうことにはなる。ともあれ滋春の母は未詳とするが正しく、滋春自身昌泰元年になくなった兄棟梁につづいて古今集撰進の直前とでもいう頃になくなっていたというべきであらう。業平は遠く元慶四年に去つたが、行平は寛平五年に、棟梁、滋春と共に姿を消し、古今集成立時の文人たちの前にはこのような在原歌人群は過去のものであつた訳だ。而して伊勢物語に登場し縁の深い人々、源融、惟喬親王、藤原敏行らも合わせて、これらの人々の歿年はすべて延喜五年前十年間の事らしいという事は在原家の歌物語、あるいは古今集との關係を考える上に何らかの示唆を与えるようにも思われるのである。こゝに滋春の交遊した人々について一見すると右の滋春家歌合を信すれば紀友則が考えられ、更に確實なものとして古今卷十に壬生忠岑との贈答があるから、このような古今撰者といった人々と交わつた事は十分考えられる。又、古今集卷七に次の記載がある。

藤原三善が六十の賀に詠みける 在原滋春

鶴亀も千歳の後は知らなくにあかぬ心にまかせはててむ

この歌はある人在原の時春がともいふ

この三善についてよく知りうれば何らかの発見ありそうであるが、この人物についてはよくわからぬ。毘沙門堂古今集注では清経の子伊与介子善としているが、尊卑分脈によれば清経の子藤原三善という事になり、父清経が延喜十年七十一才でなくなっているから、その子三善六十才の時といへば滋春の歿年は延喜末年以降となつて不審であり、時

春の作という異伝附記にも理中ありそうである。元、三は誤写され易いとも考えられるが、三善を葛野麿の子孫宮内卿元善としても滋春歿年と矛盾する様である。滋春の子とされる時春なる人物については後にのべよう。

次に滋春の官職については冒頭にあげた如く、六位内舍人から右近中将などとはつきりせず、毘沙門堂古今集注によれば更に在侍従、在少将などという称が見えるが、中将、少将などというのは在中将業平に附会させたものと考えられる節が多い。毘沙門堂古今集注は滋春の名を出すことしばしばであるが多く信用しがたいものであろう。注記の一例として、滋春甲斐国下向の事は紀有常を尋ねて行ったのであり、滋春は紀有常の継子である、などとしているのも、伊勢物語よりその解釈の発展した業平説話と抱合された虚注であらうが、滋春が業平説話に附会されて伝えられるのは何もこれら伊勢物語髓脳、毘沙門堂古今集注というものの出来た鎌倉時代になってからではないのである。

## 二

滋春が大和物語の作者であるという説は、既に和歌色葉集、伊勢物語愚見抄等に見えるところであるが、近代において藤岡作太郎博士はこの説について、「この書の作者を在原滋春といふことは、根拠ある説にもあらねば、信ずるに足らず。滋春は業平の次子なりといふを以て、その父の作なりといふ伊勢物語に摸して作れる大和物語を、その子の作と称したるに過ぎざらんか。但しこゝに注意すべき点あり。そはこの物語の半ば少し過ぎたるところにて、この書の体裁は一変す。その境に滋春のことを記したところ二箇条あり。その後の条に『仮初のゆきかひ路とぞ思ひしを今はかぎりの門出なりけり』といふ辞世の詠をよみて遠逝せり、といふは頗る伊勢物語の結末に似たり。また前の条に、滋春のことを記し、その終に『今は皆ふるごとになりたる事なり』といひて、ことに懐旧の情をもらせり。他に古事になりたることいかほどもありながら、こゝばかりにかくあるも、何となく滋春に関係ある人の筆の

すさみにや、と思はるところなきにあらず、されどこれらはなほ一の疑問に過ぎざるのみ」(国文学全史)と言及された。問題となる大和物語兩条とは143、144、の二段(章段番号および校異は阿部俊子氏著「校本大和物語とその研究の校本」による。又引用本文は為家本による)であり、滋春について語られた唯一といつてよい説話である。

(143) むかし、在中将のみむすこ在次君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭の中納言の御姪にて、五条の御となむいひける。かの在次君のいもうとの、伊勢守の妻にていますかりけるがみもとにいきて、守の召人にてありけるを、この妻の兄の在次君はしのびてすむになむありける。我のみと思ふに、この男のはらかなむまたあひたるけしきなりける。さりければ女のもとに、

(1) わすれなむとおもふ心のかなしきはうきもうからぬものにぞありける  
となむよみたりける。いまはみな古歌になりたることなり。

(144) この在次君、在中将の東にいきたりけるけにやあらむ、この子どもも、人の国がよひをなむ時々しける。心あるものにて、人の国のあはれに心細き所々にては歌よみてかきつけなどしける。小総の駅といふところは海辺になむありける。それによみて書きつけたりける、

(2) わたつみと人やみるらむあふことの涙をふさになきつめつれば

又箕輪の里といふ駅にて、

(3) いつとはわかねどたえて秋の夜ぞみのわびしさはしりまさりける

とよみてかきつけたり。かくて人の国ありきく、甲斐の国にいたりて住みけるほどに、病して死ぬとてよみたりける、

(4) かりそめのゆきかひざとぞ思ひこし今は限りの門出なりけり

とよみてなむ死にける。

此の在次君の、一所に具して知りたりける人、三河国よりのぼるとて、この駅どもにやどりて、手も見知りたりければ、みつけて、いとあはれと思ひけり。

滋春を大和物語の作者とするのはたしかにさしたる根拠ある事ではない。だが右の兩条への注目、滋春が全く無関係ではあるまいという想像は決して無視できない。藤岡博士の論に「この物語半すぎたところにて、この書の体裁一変す」とあるが、今日何人も大和を考えるに当ってはこの特色を念頭におく。つまり前半は小歌物語、後半は長大な歌物語で伝承的説話にとむ。その境はどこかは別に本文には明示されて居ない。八雲御抄に「大和物語上下」などがあるが、現今見る写本文等では二帖分断が一定のものとしようではない。たとえば伝為氏筆本の兩帖はもと一帖のものを都合によりク、リによって分けたにすぎず、一段の途中で分断している。又群書類従本では上下に分れているが139段以下を下巻とし、必ずしもこゝでは二性格の章段群の分け目になっていない。藤岡博士によれば、「その境に滋春のことを記したるところ二箇条あり」とあってこの兩段あたりのところを境とする様にうけとれる。章段の長短、内容の点からこの段を境とするという理由は一見何もない様であり、博士の言もその理由に及んではないが今精査すると一二の点に注意される。まず正治二年の奥書を伝える、勝命本大和物語<sup>(3)</sup>を見ると、この143段の前に「宇多院にはべりける人にせうそくつかはしける」なる一段を有している。猶この箇所には「此段なき本アリ」なる注記もあるが、これは他本に見られない特色である。伊勢物語とちがって巻末以外の箇所における諸本間の章段の出入のほとんど見られない大和物語にしては珍しいものであるが、143段の前に一段を持つという事はこの個所が脆弱部である事を示しているといつてよい。次に143段の書き出しは、「むかし在中将の……」であるが、大和物語諸章段中冒頭「むかし云々」を有するのは、初段より順次見ると、この143段にはじめて出て来るのであり、以下147149150155169等の諸

段に見られるのである。「むかし云々」にはじまる説話というものは、あらためて語り出す事を強調するし、又文字通り昔語的な要素を強くもつ後半部に多く見られる特徴であるが、この事なども143段がその前の部分と境をなすという様な考えを強くさせるのではあるまいか。しかのみならず、古来伊勢大和と併称される類似の歌物語であり、後者が前者を摸して作られたと考えられるのは自然であるが、この滋春の説話の条に來つて明らかに伊勢物語が頭をもちあげているのをうかがう事ができる。これかれ合せ考えて見ると藤岡博士の着眼は仲々意味深いといわなくてはならない。もとより博士の言、「これらはなほ一の疑問にすぎざるのみ」とある如く、以上を以てして何も大和の作者に滋春やその関係者をあてる証明は成り立たない。だが右の兩条は滋春という人物について考察する時、重要な資料であると考えられる。それは大和物語の成立が、多少の附加は後にあつたにせよ、大体天曆五年頃と考えられるから、(4)滋春の説話も、彼の歿後四五十年ごろまでには成立していることになり、それ故、彼の実伝に近いものを知りうるのではないか、という他に、むしろそこに見られる滋春の扱われ方によって、歌物語形成における彼の位置を探り得るのに考えられるからである。

### 三

大和物語で滋春が語り出されるところ、先ず業平の名がもち出されている事が目立つ。「在中将のみむすこ在次君」この在次君、在中将の東にいきたりけるけにやあらむ」等記されているが、業平の子の中滋春にのみ在次なる称の特記されて伝わるのは、たしかに在五につゞく存在としてうけとられていたものであろう。思うに兩段在中の名をたてゝ、滋春を出すをはじめとして、伊勢物語乃至業平に関係多い事は遠逝結末の条のみではなく、全話をおおうものである。何故に滋春は業平の名の下に語られなくてはならなかったであろうか。滋春の辞世という(4)歌は前掲の如



く古今集の歌であるが、詞書によれば滋春は東国へ下っている。母を思つて辭世を托している。これらは伊勢物語古今集等に見られる業平説話に重なり合わせになるような性質をもっている。更に(4)歌は古今集では、伊勢物語の最終段として形成された名高い業平辭世の歌、

病して弱くなりける時詠める

業平朝臣

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

の次に位置し巻十六の末尾となっている。このような事などは、在次意識が古今以前であつたにしろ、そうでなかつたにしろ、古今読者あるいは歌がたり編集者等をして、在五と滋春をからみ合わせた印象を強くさせるに十分である。古今編者はいかの意図理由あつて右のような記事編集をなしたものであらうか、どうであるかわからないが、少くとも古今集より大和物語に至る間、在中将の後継者在次という意識は生育して行つたと考えられる。而して右の古今集に見られる在次歌の性格と、同じく古今集に見える滋春の物名歌人としての性格は、大和物語滋春説話兩段にやはり顕著に見えるところである。

143、144兩段に見える在次の詠歌について、更に(1)(2)(3)等、について検討するところであらうか。(1)については類歌が指摘されている。すなわち、

わすれなむと思ふ心のつくからに在りしよりけに待つぞ恋しき 古今恋四

わするらむと思ふ心のうたがひにありしよりけに物そかなしき 伊勢物語21段(伊勢物語の章段は定家本による番号を以て示す)

の兩歌である。これらの歌の本文は(1)には「同じ」という訳ではない。初第二句にきわめて類似した句が置かれ、かつ主想に近似したものである。大和の歌がこれらと、少くとも古今の歌と関係のある事は認められるだろう。大和の(1)の歌の本文は第三句御巫本、鈴鹿本では「つくからに」とあつて、より古今の歌に接するが、古くより近似が

意識された為の本文ともとれる。143段の末尾に「いまはみな古歌になりたることなり」とあって大和の(1)の歌が古歌をふまえているという事を説明した注記であるが、この注記は右の御巫本、鈴鹿本になく、存在位置から後の書入れという事も一応は考えなくてはなるまいが、それにしてもかなり古くからあったと見るべく、このように古くより氣づかれていたという事実とあわせて、大和(1)の歌は詠人しらずの古歌である古今集にある歌によった作であるといえる。伊勢物語の歌も明らかに古今歌に少々の変改を加えて、新しい意味に変転しているような作で、関係密接であるが、ただ大和伊勢両歌の依拠関係となると、これは明らかにされそうにもなく、大和の歌が伊勢物語の歌にも拠って作られたというような事はいえぬようである。要するに大和の(1)の歌が滋春の実作であつても、それは一に古歌をふまえ、又は伊勢物語へも波及していった古歌の趣の上に立った作品なのである、というに止るであらう。伊勢物語21段の右の歌について見ると、これが業平の作であるという証拠はなく、又この歌がいつ伊勢物語に定着したかは不明である。しかしこの歌をふくむ21段は甚だ特異な一段である。つまりこの段は主に歌の贈答で長々とつづけられて、右の歌は「中ぞらに立ちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべきかな」の歌と共に末尾に位置し、この一贈答は21段より切り取つてもよいし、つけ加えてもよいといったきわめて自由な存在である。特に返歌「中ぞらに」の歌は、小式部内侍本宇津山段J段<sup>(5)</sup>の中にとり入れられて、「するがなるうつみの山の」の歌と並んだ一段に構成されている。つまり伝本により浮動性のある歌である。故にこの「中ぞらに」の歌と対をなす「わするらむと」の歌もきわめて疑わしいふしが多く、伊勢物語本文生長史においては固定のおそい存在であるという疑が強い。そうすると「わするらむと」といった古歌は業平の物語、や在次の物語に変転して定着している訳であり、単に大和物語143段滋春の物語は伊勢物語にもある歌に似た歌を以て構成されている、という点から業平物語と滋春物語とが関連するというのみではなく、業平の物語の形成乃至増補生長と滋春あるいは滋春の物語の形成とが密接に関連する、という様に考えられる。

次に②③歌は共に地名をよみこんだもので、物名歌人滋春にふさわしいような歌である。この中③については類歌が古今集巻四に見える。すなわち、

是貞の親王の家の歌合の歌

いつとはと時はわかねど秋の夜ぞもの思ふことの限りなりける

という歌である。③歌はこれと全く同じではないが密接な関係の下にある事が明らかであろう。古今集の歌は詠人は明らかでないが、是貞親王の歌合というのは萩谷朴氏によれば、寛平五年九月以前秋とすべきである、との事である。  
(平安朝歌合大成)そしてこの歌は甘巻本に見えず古今集のみに見えるものであるが、本歌合の方人は一切不明であり、古今集等に詠人明らかなものは忠峯、敏行、千里などいわゆる名歌人のみであって、歌の作者が歌合の方人であったというより撰歌合というものであったから、著名な大歌合ではあるが作者は不明なのである。この歌の詠人がわからぬというわけは、又同じ歌が異なる家集に見えているからである。宗于集を検すると、群書類従本西本願寺と歌仙家集本とは前者が後者より歌数多いが、この歌に関しては同位置同本文である。宗于是天慶二年まで生きた人であるから、年紀に矛盾はないが、宗于集という歌集自体軽々しく信用できる性質のものではなく、他人の歌の混入もある故、果して宗于の作か否か確認し難い。というのはこの歌は又群書類従本、神宮文庫本、書陵部三十六人家集本との小町集に見えるのである。<sup>(6)</sup>ともあれ、③の類歌は以上の如く、他に滋春の作という明示歌なく、かつ名高い歌であったわけで、大和の歌は、このような作をふまえて、「みのわ」という地名をよみこんだ為の変改を行っている作品である。前歌②と並んで物名歌をよくした滋春らしくはあるが、果してどれほどの真を伝えるかは判明しない。

更に歌より転じて144段の叙述を見れば、東へ行った滋春は、相模国小総、箕輪より甲斐国に至って死んでいる。而して「此の在次君の一所に具して知りたりける人、三河国よりのぼるとて、この駅どもにやどりて、この歌どもを見

て手も見知りたりければ、みつけて、いとあはれと思ひけり」とあるのは、地理的に不当である如くである。丁度業平東下りの、伊勢物語9段における道順不審の如きを思わせるものであるが、本来旅行記でなく、地名をよみこんだ歌の歌がたり構成には正確な地理認識は問題の外にあった訳だ。それにしても右の三河国よりのぼる、と三河国を突然出して来たのは何故であろうか。それについて考えられるのは、伊勢物語乃至業平の物語をふまえて立つこの説話は伊勢物語9段、古今集巻九等にある高名の三河国八橋の条に果して無縁であろうか。これも又滋春について伝わる独特の伝は少く、伊勢物語の中に連なる事によって生きつゝあった滋春の物語を示しているものではなからうか。

以上考察したところによれば、大和物語における滋春の歌なるものは、明証あるものをのぞいて、他に類歌など指摘され、変改作的性質のつよいものであり、かつ説話としても又、総体的に伊勢物語、業平の物語に関係深いという様に考えられる。すなわち大和における滋春の物語は、実録というよりは伊勢物語、業平の物語の記憶の上に立つ説話の成立を見たものであり、同時に伊勢物語形成に包含されるような性質のものであるという様に推察されるのである。

#### 四

滋春の歌について、古今集、大和物語の他に記載されているものを求めれば古今六帖があげられる。―他にずっと後の新勅撰に一首のせるがこれは大和物語の「わすれなむと」の歌である―さて古今六帖所載歌の一は、巻四にある「鶴亀も千歳の後は知らなくにあかぬ齢はまかせはてゝむ」の歌で、「在原しげはる」として出ているが、古今集に出ると同歌である。問題となるのは同巻同歌の少し前にある、下旬「人の心をいかゞ頼まむ」につくべく詠まれた、友則滋春、貫之、躬恒らの名のあげられた一群の歌である。古今六帖の本文は未だ研究整理が大成されて居らぬが、本稿では山本明清の標注古今和歌六帖によって見るに、この歌群は「女をはなれて詠める」と題し、紀友則の名の下十首

にはじまり、つゞいて在原ときはる十首、紀貫之九首、大凡河内躬恒十首とつらねてある。この中まず貫之のところのみ一首少いのは本文的脱漏でもあろうか、疑問の点である。次に「在原のときはる」とある記名は、明清本文ではこのように掲げ、イ本として「しげはる」の名をあげ、「イ本にしげはるとあるに随ふべし在原姓にときはるといふ人みえず」として滋春の作としている。一体滋春、時春混同の事は、前掲古今集「鶴亀も」の歌の左注に「この歌はある人、在原の時春がともいふ」とあって古今撰進当時又は少し後にこのような疑問ある事を伝えている。そして右の歌は六帖では右の一群のあと二首をへだてて、在原しげはる作として見えているが、六帖における「ときはる」なる本文というものは、このような事情と何らか関係してまぎれこんだという風に考えられる。というのは時春なる人は明清言う如く伝不明、勅撰集にも歌見えず、古今左注のみに名の出る人であり、その様な人が友則、躬恒、貫之らと各十首の歌の作者として並記されるのも解せない事である。昆沙門堂古今集注によれば時春は「在少将滋春カ一男也」とあるが、桃園文庫蔵一条兼良筆本伊勢物語の奥の系図には棟梁の子として記され、滋春を伊勢物語相伝の人、時春を伯父よりこの物語相伝也と記している。このように一は滋春の子、一は滋春の甥という事に伝えられ共に業平の孫という事になるが、滋春自身昆沙門堂古今集注に「或業平孫トモ云リ」などあるのと合せ物語相伝関係とからんで両者深い縁の下に重なりあつて伝えられるのは、古今集あたりの記述に大いに関係した伝承の混迷があつたのではあるまいか。<sup>(7)</sup>このところたとえ時春とあるのが本文的に正しくとも、滋春と無関係ではありえない。もとより六帖の成立については疑問多いが、成立時は古今以後である事は明らかであつて、而も後撰時代あるいはそれ以後とする説が有力であるが、その編集態度は甚だ問題となる。六帖は今日いかなる集にも見えぬ多くの歌をふくみ、実名を記す作多く、又古今集名作者を記す故、それとの因縁浅きものとは考えられない。材料となつたものはおそらく多様であろうが、果して作者としてあげてある人が本当にそこに掲げてある歌をよんだのか、相当不確かなものか、俄に信じ難い

点が多い。だがこゝで問題とするのは六帖にどのように伝えられている事実である。

さて六帖を見よう。「人の心をいかゞたのまん」の下句につくべき上句は、次の順で配列されている。

友則

- ① たきつせにうき草の根はとめつとも
- ② あさがほにきのふの花はかれずとも
- ③ うつせみをそめてともしにかひつとも
- ④ とりのこをとをつゝとをはかさぬとも
- ⑤ かたなもてながるゝ水はきりつとも
- ⑥ くものあみに吹くる風はとめつとも
- ⑦ ふく風を雲のふくろにとめつとも
- ⑧ ふる雲をそらにとめてはありぬとも
- ⑨ おく露をけたで玉とはなしつとも
- ⑩ いるつきを山のはにげていれずとも
- ⑪ 毛のすゑにはねつく馬はつなぐとも
- ⑫ そでのうちに月の光はとゝむとも
- ⑬ ちらずしてこぞのさくらはありぬとも
- ⑭ もみぢ葉に風をばつゝみとめつとも
- ⑮ たごの浦に波をばしづめとめつとも
- ⑯ 水のあわを白玉とてはぬきつとも

滋春（時春）

⑮ かみすちに千ひろの舟はつなぐとも

⑯ こふの石をありにおほせてはこぶとも

⑰ かのまゆにくにこほりをばたてつとも

⑱ 火をうちて水のうちにはともすとも

以上関係ある部分のみあげたが、この中、④、⑨、⑩、⑬の歌は伊勢物語50段に深い関係がある。この類歌関係のあるものや、伊勢物語の歌が古今六帖の歌によってつくられたというような推察は、既に契沖や真淵などが簡單乍らその著書でふれているが、今この部の問題をとらえて精査して行こう。すなわち50段を見ると次の如くある。

むかし男、うらむる人をうらみて、

(1) 鳥の子をとをつゝとをはかさぬとおもはぬ人をおもふものは

といへりければ、

(2) あきつゆはきえのこりてもありぬべしたれかこのよをたのみはつべき

又おとこ、

(3) 吹風にこそその桜はちらずともあなたのみがた人の心は

又女返し、

(4) ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

又おとこ、

(5) ゆく水とすぐるよはひとちる花といづれまてふことをきくらん

あだくらべかたみにしけるおとこ女のしのびありきしけることなるべし。

右は天福本の本文によって記したが、これと前記六帖と比較するとまず、

④ — (1)、(15) — (1)

の如き、相応じた類似関係が順を追って発見できる。更に勢語伝本を検すると一段と密接な関係が見出される。塗籠本では、

昔男ありけり人をうらみて、

(1) 鳥のこをとおつゝとおはかさぬともいかなたのまむ人のこゝろを

(1) しらつゆをけたてちとせはありぬともいかなたのまむ人のこゝろお  
といありければをんな、

(1) あさつゆはきゑのこりてもありぬべしたれかこの世をたのみはつべき

また男ふく風にこそそのさくらはちらずともあなたのみがた人のこゝろや

またゑしをむな、

ゆく水にかずくよりもほかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

また男ゆく水とすくるよはひとちるはなといつれまててふことをきくらん

あだにてたがひにしのびありきする事をいふなるべし。

とあって、「しらつゆを」の歌をもっている。これを今(1)とすると、六帖との類似歌関係は塗籠本では又一つ加わって、

④ — (1)、(9) — (1)、(15) — (5)

の如くなる。



以上の事実について見る時、六帖の右の部分と勢語とは何らかの関係にあると見なくてはならぬ。当然考えられる事は伊勢物語50段は六帖のようなものによってつくられているという事である。50段の各歌はそれ／＼下句「思はぬ人を思ふものかは」「たれかこのよをたのみはつべき」「あなたのみがた人の心は」「おもはぬ人を思ふなりけり」と詞こそ異れ「人の心をいかゞたのまむ」と同義のものであり、表現を各様にかえたにすぎないし、友則として列記されている歌のみではなく、滋春として掲げられているものも通してその順序に、兩人の作にまたがって類似の歌を勢語と合わせる事ができるからである。殊に塗籠本の本文はいよ／＼その感を強める。(4)の歌、(4)の歌の下句はいずれも「いかゞたのまむ人のこゝろお」とます／＼六帖に近接し、(4)の存在は全く歌の列記であり、これに並ぶ(4)は、(4)の翻意歌の如く見られ、全体として物語構成の点で天福本より劣り、何か天福本のような形の原型的和歌列記の面影を止めている。塗籠本という本は総段数の少い畧本であり、且東下りの段、その他章段欠脱結合の点甚だ特色あり、何か古型を示す本であろうとは今までも考えられているし、このまゝの形そのものとは言えないにしろ、その様に考える事も不当ではないと思われる。このように考えて来ると両者の関係という点では六帖の歌が勢語よりとつた、と考える事は無理で、どうしても勢語が六帖よりとつたといわざるをえない。ただ一つ六帖の⑩歌が少々問題になる。この歌は、古今集卷十七にあり、伊勢物語82段にもある業平の歌である、「あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん」と何かの関係を思わせる。もとより「山のはにげていれず」という句が全く業平独自のものかという事はわからないが、たゞ、紀貫之が土佐日記に「こよひ月は海にぞ入る。業平の君の、山の端にげていれずもあらなん、といふ歌なんおもほゆる。もし海辺にてよまましかば、波立ちさへて入れずもあらなん、ともよみてましや」といっているところを見ると、貫之にはこの句が業平のものとして強く意識されていたというべきであり、貫之ほどの人物の事であるから、和歌について不明であろう筈なく、業平歿後この句は業平のものとして一

般に意識されていたという疑は強い。そうすると⑩歌は業平の歌をふまえてつくられたものである、といえそうである。だがこの⑩歌は必ずしも伊勢物語によって作られた、という事はできないのであり、殊に⑩歌はたゞ「山のはにげていれず」なる句をとったのであって、④、⑨、⑬等の歌の伊勢物語50段の歌との関係とは、まるでその消化変転の法が異なるものである。かりに⑩歌が伊勢物語をふまえているにしろ、勢語50段と六帖との関係とは異なる段階のものであって、50段が六帖のこの一群の如きものによって作られたとする事を否定するものではない。

このように勢語50段と六帖一群との関係について、一応形式的な考察を行ったのであるが、両者の関係についてこのように考える事については、更に一二の事項に関して考察を加えなくてはならぬ。第一には勢語50段は果して六帖によって作られたものか、六帖の資料になったようなものから構成されたのか、という点である。六帖とその資料の関係はよくわからない。だが六帖の資料といったものを想定した場合、勢語50段がかゝわるものは六帖の一群のような形になっていたものであるという事はいえると思う。もしそうでないなら完全に勢語と六帖との関係となる。第二にも六帖におけるこれらの歌が、示されているような人々によって實際作られたとするならば、ありうる事であろうか。友則、貫之、躬恒らは滋春と同時代人であり、共に歌の道の巧者でありこれらの人々が会して同趣の歌をよんだ、というのはいりうる事である。友則は古今集卷十六に見える如く、父が惟喬親王に仕えたのであり、その歌を友則が親王におくったりなどして居り、貫之などと共に紀氏で、とにかく業平一族に縁は深い。又六帖に見えるような歌が詠み合われるという事も、歌合など、当時流行の文学的集会などよりして考えうる事であり、又もし所伝の如く滋春家歌合なる如きものがあつたならば、当代の名歌人は滋春と相会しうる訳である。そのように仮にこれらの人々の相会して作つたとする時、その時期は当然古今以前のものである。そこでまず勢語50段成立の上限はさかのぼりそうだが、50段は古今集の詠人知らず歌(二)をとって居るのであって、この一段の構成上からしても、50段が材料となつて右

会合歌が成立したと考える事は出来ない。つまり50段は(イ)(イ)(イ)(イ)(イ)等の歌の単なる結合連鎖の形であり伊勢物語全章段中でも甚だ特異なもので、こういった形のものは同趣意の歌をつらねる事によっていくらでも挿入できるようなものである。それだけに歌の配合に妙味のある一段であるが、贈答歌といつてもしっくりしないところがあつて上田秋成の論などあるが、(イ)(イ)(イ)等は決して常識的な贈答歌、つまり贈歌の詞をとりふまえて返歌をするという形でないのは、26段の古今集に本来無縁で並ぶ業平小町歌を贈答に仕立てたのと同じ様なものであり、これも既述の如き一群歌を勝手にとつて並べたからである。(イ)歌は古今集にある歌であるが、古今集から伊勢物語が採つたと考えるのは、周知の如く古今集歌を伊勢物語が採っている一般的な態度から推して決して無理ではない。又何ら業平の歌をふくみもせず、関係もない歌群が、古今集によつて飛躍する以前の原伊勢物語なり、業平家集なりにあつた、と考える事は無理である。而して(イ)歌下句天福本をはじめ定家本系古本系諸本の「おもはぬ人をおもふなりけり」は(イ)歌「思はぬ人を思ふものは」に応ずる如き形であるが、前にのべた如き塗籠本あるいは大島本系諸本では「いかゞたのまむ人のこゝろお」という六帖の形に近く、これが六帖の如きものによつて補訂されたという風に考えるのはあたるまい。おそらくこの方が古い形で、天福本のような本文は(イ)(イ)(イ)の一群と(イ)歌との結合によつて生じた補訂ではないかと考えられる。又(イ)歌の位置からいつても(イ)歌が原伊勢物語あるいは業平家集に本有したなど考える事は出来ないようである。猶(イ)歌に関し、この歌が六帖一群の滋春の作に並ぶ貫之の作の中に「行く水にふりくる雪はとまるとも」というのがあり、これと関係ありそうなところから六帖一群は勢語50段によつたという風に考えるのは牽強の様である。似た様なものを求めればその前の⑩の「氷の泡をしら玉としてはぬきつとも」あるいは⑪の「火を打て水の内にはとますとも」など次々にあげられるが、むしろうがつて推察するならば六帖一群の如きものにおける、こういった歌の類想から、この一群の歌を次々と変改する事による冗漫をさけて古今名歌であるこの古歌を結合させ、且(イ)の如き

は(三)に應ずると共に全体のしめくゝりとして「行く水とすぐるよはひとちる花と」という様に、はかなき事物を列記して「いつれまててふことをきくらん」と収めているあたり、巧んだ構成をなしているといえよう。尤も真名本では(四)歌を欠いて居り、本文文化について疑わしいふしがあつて、諸家の説あり、たとえば藤井高尚の新釈ではこの歌なきをよしとし「これは後の人のかたへに註の如くかきいれおきし歌をあやまりて本文にかきつゞけたる本を見て其のちの人の又男のよみておくれる歌ぞとこゝろへて又男といふもじをはしに加へしなるべし」といつている。このような解釈に見られるように単なる贈答歌というより全段を見わたした要約注記的性質はたしかで、この一段は歌の累層的形成による事を思わせるに十分である。

以上いろ／＼と言葉をつくしたが、勢語50段は、(1)(2)(3)(4)に關する限りそれぞれ別箇の古歌を方々よりあつめたり記憶によつたりして作られたというのではなく、古今六帖にある一群の形のものによつて構成されたといつてよい。そしてそれがかりに六帖そのものでないしろその50段の成立時が古今以後と考えられるところから、六帖自体の成立も古今以後明瞭にいつかわからぬ以上、現在見うる記載された文献という意味で、六帖及び古今集歌等によつて構成されていると断じておく事とする。

## 五

前二節で中心的に取り扱った大和物語古今六帖等の歌の他、歌人滋春の作品は次の如くである。

- |                               |             |
|-------------------------------|-------------|
| 1 鶴亀も千歳の後は知らなくにあかぬ心にまかせはてむ    | 古今卷七        |
| 2 わかれては程を隔つと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき | 古今卷八        |
| 3 浪のうつせみれば珠ぞ乱れける拾はば袖にはかなからむや  | 古今卷十        |
|                               | 424 372 355 |

4 命とて露をたのむにかたければもの侘びしらになくのべの蟲

古今卷十 451

5 はるがすみながし通ひ路なかりせば秋くる雁はかへらざらまし

古今卷十 465

6 かりそめのゆきかひちとぞ思ひ来し今はかぎりの門出なりけり

古今卷十六 862

7 君がため命甲斐へぞ我は行くつるの郡の齡うるなり

六帖第二 郡

8 住みはてむいほたるべくも見えなくになど程もなき身をこがすらむ

六帖第六 蛭

これらのうち、3、4、5、6、7、8の歌はすべて物名をよみこんた歌であり、3、4、5、8はそれぞれ物の題附されているが、6、7は甲斐の地名をよみこむと共に、前掲古今集の詞書により、事実かと思われる甲斐旅行のに関連したものとなっている。ところが7の歌は類従本、西本願寺本、歌仙家集本、書陵部本等の忠岑集に見える歌である。果して滋春の実作であると認むべきかには問題がある。次に1は先にふれたものであるが、時春作という異伝あるもので賀の歌である。残る2については「友達のひとの国へまかりけるに詠める」という詞書があるものであるが、他歌との関係において検討すべき点がある。すなわちこれに似通った歌を伊勢物語に見出しうる。22段に

むかしはかなくてたえにけるなか猶やわすれざりけむ、女のもとより、

うきながら人をばえしもわすれねばかつうらみつゝ猶ぞこひしき

といへりければ、さればよといひておとこ、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水のながれてたえじとぞ思ふ

とはいひけれどその夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜のちよをひとよになずらへてやちよしねばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜のちよをひとよになせりともことばのこりてとりやなきなん

※いにしへよりもあはれにてなむかよひける※

とある第一首目の歌がそれである。もとよりこの歌の作者は明らかではない。作者不明はこの段の歌すべてそうであって、第二首続後撰に業平作とあるが、勿論伊勢物語の歌を業平作としたためのもの、第三首は古今六帖に終句のみ「恋はさめなむ」と異って出る詠人不知の類歌があり、第四首は続古今に見えるが詠人はわからぬ歌である。而して全体として、前に考察した如き21、50兩段と同じく、数々の歌の連鎖を主とした、詞の簡単な章段であり、殊に大きな異文として、大島本系の諸本―大島本、神宮文庫本、谷森本及び塗籠本、真名本等では最後の※の一節を欠いている。そのような点この段の性格は21、50兩段などに通うものがあるようである。もとより古今372歌と「うきながら」の歌とは類似した点があるといっても直接的な依拠取材関係を認めようといったようなものではなく、古今集、伊勢物語を、それ自体内部あるいは両作について比較する時、他のものよりもこの両歌の類似が顕著なのである。だから古今集所載の滋春の歌2については、伊勢物語中の業平作と明証ある歌あるいは彼自体に古くよりまつた逸話を軸に構成されたというのではない、詠人不知などの歌を多く連ねるといった後期成長性をもつ贈答形式によって構成される章段に、類似したふしある歌が指摘されるという点で、前掲説述した大和物語を143段(1)歌と伊勢物語21段等の場合などに近づくような性質をみとめうるという一考察を加えておく。

このような滋春の諸作品、又は滋春作と伝えられる作品、および本稿で最初よりとりあげて来た、彼にまつる説話等をふくめた滋春の周辺の問題などを綜考すると、どのような事が考えられるだろうか。

第一に彼の作品をきびしく古今六首、いや異伝あるものをのぞき五首に限って見る時、そこに示されているものは(一)滋春は物名歌をよくする人である。(二)滋春は東国に旅して甲斐国で死んでいる。(三)滋春の歌には強いて解すれば業平あるいは伊勢物語にかゝわるものがある、等々である。そして更に彼の作品等を彼の名と共に伝えられているもの

古今集	大和143 144段	古今六帖
(一) 3 4 5 ↓ (2) (3)△	(二) 6 (4) ↓ (4)	(三) 2 ↓ (1)
7△	8	第四の一群

△印は、その歌のあるいは類歌の他、人の集に出るもの

、深養父各二首という計算であるから、物名歌に関する限り、貫之、友則ら大家に互しうる存在であつたろう。滋春は古今撰者たちとほぼ同時代に生きた人であり、官位も似たような列で、縁も深い。殊に忠岑とは物名歌による贈答も古今集巻十に記し止められている。だから彼の作と伝えられるものを大和物語、古今六帖におよぼして見た時、物名歌はますます多く、いよゝゝ当代の歌の巧者として名をとった人物であつたという風にとれる。これら大和・六帖の歌は事実彼の作品であつて当然彼の特色を示す歌が出て来る、という事は勿論あろう。が、又彼に附会されたものがあるにしても滋春的なものゝ延長線上にあるのである。大和物語・滋春説話にしても、業平の子の中、彼のみが在次としてあのように伝えられるのは、甲斐国行の歌をのこしたり、行跡業平に類するという事のみによつてではなく、業平の手稿を伝えたという事があるかもしれないが、それは別に、歌の巧者である事が、業平の後継者として必須の事だからである。(三)に関しては主に大和物語、古今六帖といった、やゝ滋春生存期よりへだたった成立の著作に多くかゝわる問題で、伊勢物語成立論上重要である。大和物語の滋春説話は内容的にも明かに伊勢物語をふまえている点、関係があるといえるだろうが、彼の歌を中心に見る時、古今集所載のものでは前述の如く滋春辞世が業平辞世と並んでいる事や、巻八の「わかれては」の歌が勢語22段に関わるかというような事があげられるが、これらはあまりにも

を有する大和物語、古今六帖など十世紀半ごろの著作物に及ぼせば、この三点は更に拡大強化されているのである。(一)(二)に関して見よう。古今滋春歌六首中物名歌は三首、猶一首は甲斐国旅先の作で甲斐なる地名をよみ込んだ歌である。巻十物名歌中三首収められている事はこの巻中貫之、友則各四首につゞいて多くの作をのこすのであり、滋春については忠岑

微細牽強であるとして否定して言えば、古今滋春歌は伊勢物語に直接関わりないといえる。しかし前節で考察の如く大和・六帖に滋春名を伝えるところに伊勢物語の歌と類似関連するものがあり、而も勢語の該当箇所は本文の共通問題があるところである、というのは決して両者無関係といつてすまされることではない。大和143段の歌と勢語21段との関係、六帖第四の一群と勢語50段との関係に見られるような、滋春歌なる伝えある作と関わりをもつ勢語諸段とは21段50段で、更に古今巻八の滋春歌に關係する22段も含める場合でも、すべて多くの歌の連鎖を主とした章段又は章段の一部である。形式的ではあるが、一応勢語中一段に五首以上の歌をふくむ章段は、21段の七首を筆頭に、23、50、65、82、87の諸段があげられるし、四首以上の章段は22段の他、9、16、24、75の諸段がある。だが、23、65、82、87、9、16、24の諸段はいずれも長大な詞をもっている長章段であつて、この点やはり21、22、50段及び75段といった章段だけでは多くの歌の連鎖を主とした章段といえる。故にこの21、22、50段の特質は認めなくてはならぬ。これらは、単にそれだけでなく、前節に説いた如く、業平の歌をふくまず、50段における六帖歌との特殊の關係ある部分をのぞいてはすべて詠人不知の古歌で構成され、又本文的にも生長的構成の問題をもつ。滋春を探索する時明瞭な事実として、古今以後滋春の名が伝えられるところに多く伊勢物語が出現する、という事実は否定できないところである。この理由は簡単に考えれば、業平の子滋春については在次という名が示す如く、その伝は古今歌の影響なども加わり、業平にまつわつて生育した為、彼の名が広まつて行くところには伊勢物語によつて構成された歌や物語がのこつたのである、という事になろう。だが如上の勢語諸段と滋春歌との關係では、決してそうのみは考えられないのである。六帖第四の一群歌と勢語50段との關係は、六帖によつて50段が構成されたという關係である。大和物語143段の歌のかゝわる勢語21段の構造はこの章段成立自体の問題を包蔵し、大和物語143段の歌は勢語21段によつて作られた、とはいへぬのである。又同じような性質の22段に及べば、古今集巻八の滋春歌は、滋春が既に出来ていた勢語22段の歌によつて



詠んだものであるなども決して言えるものではない。滋春歿後在中将の後継者としての滋春物語が生育して行った事は大和物語が伝えている如く十分考えられる事であろうが、それと同時にこのような滋春というものが伊勢物語の生長に関わって来る、つまり滋春の存在を媒介として構成された部分がある、という意味で、滋春は伊勢物語の成立伝流に無縁の人ではない。伊勢物語は業平の家集のようなものより出発したという事は肯定しうる推論であるが、そのように生長発展した作品伊勢物語は、決して整然とした業平一代記でも恋愛物語集でもないのである。その生長は一個人の歌集を保存しつつ、発展するところからおこる当然の不整然の発展ではあるが、増加される歌物語がすべて全く手当たり次第につみ重ねられた無方向のものであったろうか。業平の作品と、業平の逸話とに加えて、その伝流にまつわる人々の物語が流入し、所をえているのはむしろ当然ではあるまいか。物語化のためには業平に無関係な人の作や古歌など巧な転変の下に加わりはしたが、業平の歌や行動に応答附随するのはまず彼の交際あった人々、惟喬親王、紀有常、藤原敏行あるいは在原行平で、これらの人の作品や名前などは伊勢物語に見出される。更に業平の交わった女人の作は当然多く加えられたが、彼の逸話がふくれると共に事実縁のない女人の歌、たとえば小町など名流の作を配する事も行われるわけである。猶伊勢物語に多くの歌を提供している古今集を見ると、伊勢物語にとられている歌の多くが、実に業平の歌の前後に群をなす如く見出されるが、これも伊勢物語の歌あるいは歌物語の形成のあり方の一斑を示すもので、伊勢物語において、業平の歌に加わって膨張した歌というものは必ずしも放恣にとり入れられたのではない。この事については別に詳論したい。だからこのようにして歌がとり入れられ、物語が形成されてくると業平より一世代あとの滋春などは、業平たる昔男と交際する人物としては出て来にくいが、それが業平の子であり特に在次という意識の上にたてばたつほど、編集者にとってはその歌を機縁として、何物かを物語に介入させるようになってくるのはむしろ当然で、仮に在次が事実業平集あるいは伊勢物語の伝流者であれば猶更である。伊勢物語成立

伝流には在原一門縁者歌人たちの影がこい。これは歌集発展形態の作品として、当時の文芸作品伝流の実態からも当然の事である。藤氏の勢力の下、光をうすくする在原氏、紀氏の伝える物語の、業平という中心人物の中には、西に流浪する中納言行平の歎声も、東に哀歌をのこす六位滋春の影像も重なって行ったにちがいない。こういう力にさへえられた滋春に対する注目を考えると、歌物語形成の気運の中にこそ、一方生長しつゝある伊勢物語と相ついで成立する大和物語が、実在諸歌人の実名を出した実録的小歌物語の前半と、これよりすゝんで業平の歌をも出す一群をはじめ、古伝承的歌物語の長大なる章段群を見せる後半部との交点に、業平をふまえた滋春を出したり、滋春をして大和の作者という伝えが出たりするのもうなずかれるのではあるまいか。

## 六

以上に附加して考察して置きたいのは、滋春が伊勢物語の生長にかゝわるといふ事を考えると、彼の和歌における特性についてのつながりはどうか、というような疑問である。

現存伊勢物語諸本においては、今日他の文献より証明されるような業平の歌が多くある。古今集の業平の歌はすべて伊勢物語にある。後撰集では必ずしもそうでない。一体業平作という記載はどの撰集まで信用してよいものであるうか。今、古今集に限って見ると、その業平の歌には、折句歌の如きはあり、縁語懸詞を用いた点広くいつて物名をよんだ歌はあるが、撰集物名の部に入った、又は入るような深く題をかくした物名歌はない。後撰集まで入れてもそうである。伊勢物語の中には他に、事実業平の歌であつて今日弁じえないものもあるうが、少くとも勅撰集に精撰された彼の歌は、後撰集まで見たところ、滋春が得意としたような物名歌は存在しない。しかるに伊勢物語はこの種物名歌を有している。

115 むかしみちのくににて男女すみけり。男みやこへいなむといふ。この女いとかなしうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのゐて、都島といふ所にて酒のませてよめる、

をきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり

(天福本による)

P むかしすきものども集りて、物の名をよみみけるに、かはたけ、あるおとこ

小夜ふけてなかばたけゆく久方の月吹きかえせ秋の山風

(伝為氏筆本による。  
天理本にあり。)

Q むかしおとこ、はるかなるほどに行きたりけるに、つくしのつと、人の乞ひたりけるに、色革やるとて

みやこよりこゝまで来ればつともなしたちのをがはのはしのみぞある

所の名なるべし。

(神宮文庫本による。伝為氏筆本、  
谷森本、天理本等にあり。)

右の中115段は古今集墨減歌小野小町の歌であり、古今集定家本では巻末に附せられているが、元永本清輔本等物名の巻にあるものである。P段の歌は古今集巻十物名歌景式王の歌である。Q段の歌は拾遺集巻七物名歌の部の業平の歌である。これら通観して注意されるのは次の三点である。第一にこの三段は決してすべての勢語伝本に存在するものではない。115段は真名本ではこれを欠き、又伝為氏筆本中掲げられた、他本との校合によってそれに欠けている章段をそれぞれ記している皇太后越後本、小式部内侍本の諸断片にあるものであるから、この115段を欠く本の存在流布は認められる。P段、Q段は右の小式部内侍本断片等にあるもので、神宮文庫本、谷森本、天理図書館の為家本伊勢物語巻末附載諸段の他多くの本がこれを欠く。つまり右三段は伊勢物語章段形成史上比較的後の加入で、必ずしもすべての本に定着しなかった、と見るのが妥当である。115段の位置などもその事を示しているようである。(12)第二にこの三段いずれも題を示して物名歌なる事を各章段内にうち出して居り、他の要素もあるが、明らかに物名歌として、その興味の下に章段構成されているふしがあり、殊にP段はわざ／＼物名をよんだこととわっているのは特異なるものであ

る。第三にQ段にはじめて拾遺集物名の部に出る業平の歌がとりあげられている。だがこの歌を業平作とする事ほどの程度信用できるだろうか。拾遺集に業平作と見える歌は61段もとり入れられている。しかし同じく拾遺集の業平作とする他の一首は伊勢物語に拾録されていない。池田博士はこれら事実から伊勢物語が拾遺集より材料をえたとする見方を否定され、Q段と拾遺集の關係は逆に拾遺集が伊勢物語より材料を採る事ありうる証とされた。(伊勢物語に就きての研究篇六三八頁)これは妥当な御見解と思う。かく見れば伊勢物語の物名歌採録は逆に物名歌人業平の名を伝えたとである。

さて滋春は物名歌をよくし、これが彼の歌才歌風の特色をなしている。このような彼の特色又は滋春的なものとして打出され、膨張されるべき性格の歌は伊勢物語諸本を檢すると隠然と存在する事を知りうるのであつて、滋春が伊勢物語、業平の物語に結合して關係をもつて来たという事とは矛盾せず、同一線上に考えられる事である。勿論物名歌流入の事はこの物語の編集形成者をふくめた荷担享受者の嗜好によつて、歌物語が撰集部立に見られるような多くの種類の歌を揃えるという事が考えられる。又物名歌は素材によつて分類された四季、賀などの歌と異り、表現技法をもつて分類される性質のものであるから、その歌をもつて小話を形成する時にはやはり歌自体の特色興味が打出されているものである。しかし乍ら勢語物名歌章段三段の如きは、右のような時代の嗜好というようなものによつてのみ漫然と次々に形成されたものであろうか。伊勢物語という作品は業平の物語が虚構されて行くが、形成者にとっては業平及びその周辺の人々の記憶から全く脱しうる事はないであらう。大和物語に伝えられる在中に接した在次の事、勢語に関りあつて伝えられる在次物語が生育持続していた時代にあつては、在次紀行歌物語の如き地名をよみこんだ物名歌的な歌を以て歌物語を形成する力が115、Q段に見られ、又古今集卷十物名歌の滋春の「命とて」の歌の注目からその次に位置する景式王の「さよふけて」の歌を以て勢語82段「あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなん」88段「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」などの歌物語の趣によつてP段の

成立を見た、というような事は考えられないであらうか。

ともあれ滋春を特色づける物名歌によって構成された章段は、やはり伊勢物語の逐次的増大の線上に見出されるようである点、前述の滋春と伊勢物語生成との関係にあわせ考うべきものではなからうか。問題として附記し擱筆する。

本稿は昭和三十二年度文部省科学研究費による研究『平安時代における歌物語形成に関する研究』の成果の一部である。

## 註

- (1) 伊勢物語髓脳のある本には滋春とあるところ「義晴、よしはる」と記したものがあがあるが、読みあやまりであらう。
- (2) 拙稿「勢語古註の人名を顧むす説について」(弘前大学人文社会第一〇号)にこの種問題について考察した。
- (3) 久曾神昇山本寿恵子両氏著「勝命本大和物語とその研究」による。
- (4) 大和物語成立年代は作中人物の官職を中心に考察して、この頃を妥当とする説をとる。
- (5) 定家本にない章段については池田博士「伊勢物語に就きての研究校本篇」にあげられた諸断片を最初よりA B C…の番号を附して示す。

(6) 神宮文庫本小町集については前田善子氏著「小野小町」の小町集校異を参照した。

(7) 大津有一博士「伊勢物語―定家本の展望」(岩波講座日本文学)業平自筆本相伝の伝えに関する資料をあげ相伝の事について論述されている。

(8) 勢語臆断、伊勢物語古意等に六帖友則歌をひき注意する条がある。又近代池田博士は六帖歌と勢語との関係は、「とりの子を」「白露は」の歌はもと古歌であったものを六帖はそのまゝとり勢語は修正採録したかとのべられた(伊勢物語に就きての研究篇六四三頁)一首ずつきはなして見ればその様に見えるのが妥当の如くであるが、六帖一群と50段以後すべてについて対比する時、単にそうは解されぬと思う。

(9) 塗籠本伊勢物語については屋代弘賢の不忍文庫本の原本である本間美術館蔵伝民卿局筆本が発見されている。塗籠本文について論及すべき点をふくむ。たとえば本稿に関しては、定家本の23段に当る部分で不忍文庫本の「わするらむと」の歌の前の一行墨色濃い書入れの如きは原本ではうすく消去しており、又50段に当る部分「いかがたのまむ人のところを」の部分、原本では「おもはぬ人をおもふものかは一本」の如き書入が発見される。詳しくは別に論じたい。

(10) よしやあしや「うらむる人を怨みての」条「此贈答のついで前後わきなくみだりて見ゆ。今試に改めむ、云々」とあり。

(11) 池田博士「伊勢物語につきての研究研究篇」、拙稿「勢語小式部内侍本考」(国語と国文学昭和33年5月号)参照

(12) 拙稿「伊勢物語生成考」(国語と国文学昭和24年5月号)参照